


所 属	ライフデザイン学部ライフデザイン学科		
主な担当科目	生物学(生命史)、公共経営論特講		
	氏 名	原田 憲一	
	フリガナ	ハラダ ケンイチ	
	職 位	学長	
	学 位 等	理学博士	
研究内容・社会業績等			
<p>研究内容:1970年、京都大学理学部地質学鉱物学教室卒業。1970～72年、米国マサチューセッツ州にあるウッズホール海洋学研究所にて海洋地質学と微古生物学(渦鞭毛藻化石)を学び、1976年、「深海底産マンガンの成因」の研究で京都大学より博士号を取得。独キール大学でのアレクサンダー・フォン・フンボルト財団奨学研究員(1977～79年)、米国ワシントン州のワシントン州立大学客員講師(1979～80年)をへて、1980年、山形大学理学部地球科学科助教授に就任。</p> <p>新たに資源科学の考え方を学び、資源と技術の関係に注目して、地域の資源環境が伝統技術の発展に与えた影響から文明のあり方を考える「資源人類学」の研究を行う。1990年、地球環境学科への学科名改称を機に、地球物質循環の観点から地球の資源・環境特性を論じ、固体地球(岩石圏)と大気圏・水圏および生命圏の相互関係を統一的に説明する独自の「地球環境論」を打ち立てた。2002年、京都造形芸術大学への異動を機に、人間にとっての芸術の意味を生命史の観点から考察し、生命史上初の芸術家となった人類は、生命史的使命を果たすために、1億年後に出現する知的生命体に芸術作品を通じてメッセージを送るべきだとして、「美の化石美術館」構想を提案。現在は、固体地球と生命圏を結びつける土(土壌)に注目して、各種の地質災害が頻発する日本列島では居住適地は災害多発地帯にあることを見出し、各種の災害が日本文明の土台をつくったという「災害文化論」を展開している。</p> <p>社会業績:科学技術庁資源調査会資源エネルギー部会コバルトクラスト鉱床調査委員会・専門委員長(1985～87年)、山形県総合開発審議会(企画部会)委員(1993～95年)、同(環境部会)委員(1995～96年)、同委員(1999～2000年)、山形県総合政策審議会・委員(2001～02年)、京都市図書館協議会・会長(2005～07年、2009～10年)、山陰海岸ジオパーク専門部会・委員(2009～14年)、京都伝統文化の森推進協議会・副会長(2011年～現在)。ピンホール写真芸術学会・編集委員長(2007～13年)、比較文明学会・副会長(2009～14年)、萩ジオパーク構想推進協議会・専門委員(2015年～現在)。</p>			
論文・書籍・資格等			
著書	<p>Harada, K. (2016) Chapter 9. Disaster Severity and Disaster Mitigation in Japan. In: A. Tagrowski, J. Abe and H. Kato (Eds) "Japanese Civilization in the 21st Century", pp.153-170, nova</p> <p>原田憲一(2012) 第一章科学・技術から文明を考える 科学技術はどこで間違えたのか——科学と技術と科学技術の違いから考える、伊東俊太郎・染谷臣道編『収奪文明から還流文明へ』東海大学出版会、24-44頁</p> <p>原田憲一(2012) 第一章日本列島の地史、鎌田東二編『日本の聖地文化』創元社、22-62頁</p> <p>原田憲一(2011) 解題(第一部文明論へのアプローチ、第二部地域文明へのアプローチ、評論・コラム)、比較文明学会関西支部編『地球時代の文明学 2』京都通信社、7、96、182頁</p> <p>原田憲一(2010) モノ学・感覚価値研究会展覧会の意義 地球が生み出した美と人が生み出す美、モノ学・感覚価値研究会アート分科会編『物景色』美学出版、56-63頁</p> <p>原田憲一(2010) 平安京の自然学——資源科学から都の工業生産を考える——、鎌田東二編『平安京のコスモロジー』角川書店、76-90頁</p> <p>鎌田東二・原田憲一・鳥居本幸代・中村利則・関本徹生(2010) ディスカッションと追加コメント、鎌田東二編『平安京のコスモロジー』角川書店、121-163頁</p> <p>原田憲一(2010) 第1章 つくられる場 1 ——地球史・生命史の観点から ——、松井利夫・上村博編『芸術環境を育てるために』角川学芸出版、23-45頁</p> <p>原田憲一・西田史朗(2009) 第4章 生命を育む共生の星、日本地質学会監修 地学読本刊行小委員会編『地学は何ができるか』愛智出版、159-207頁</p> <p>西田史朗・原田憲一(2009) 第3章 進化する生命の星、日本地質学会監修 地学読本刊行小委員会編『地学は何ができるか』愛智出版、108-158頁</p> <p>原田憲一(2008) 第一章 環太平洋の文明 地質文明観——安定大陸型文明と変動帯型文明の諸相、比較文明学会関西支部編『地球時代の文明学』京都通社、7-38頁</p> <p>原田憲一(2007) 地球科学フロンティア、茂木健一郎・西垣通・原田憲一・佐倉統 『科学に生きる』(著名人が語るく知の最前線>4)リブリオ出版、131-196頁</p> <p>原田憲一(2006) 補論 文化地質学的都市論の試み、端信之・中牧弘允・NIRA編『都市空間を創造する』日本経済評論社、307-340頁</p> <p>原田憲一(2005) 第二章 あらゆる場所に風土がある、第一節地域生活に関わる地質、中路正恒編『地域学』角川書店、74-89頁</p> <p>原田憲一(2005) 第四章 地域学の実践へ、第二節伝統的生活の今日的意義、中路正恒編『地域学』角川書店、286-298頁</p> <p>原田憲一(2002) 発題Ⅲ 将来世代からみた資源・環境の公共性、佐々木毅・金泰昌編『地球環境と公共性』(公共哲学9)東京大学出版会、59-95頁</p> <p>原田憲一(1999) 第7章 日本列島の自然を守る水稲農業の再生、北原貞輔・松行康夫編『環境経営論Ⅱ——自然環境と人間の存在』財務経理協会、207-232頁</p> <p>原田憲一(1996) 第5章 崩壊する近代科学の神話、梅原猛編『新たな文明の創造』(朝倉講座文明と環境、第15巻)朝倉書店、76-93頁、年10月</p> <p>原田憲一(1993) 第2章 日本人と海 2. 海から見た文明の盛衰、小泉格・安田喜憲編『海・渦・日本人——日本海文明交流圏』講談社、69-102頁、年4月</p> <p>原田憲一(1990) 『地球について——環境危機・資源枯渇と人類の未来』国際書院、373頁</p>		
辞典	<p>電通エコ・コミュニケーション・ネットワーク編(2004)『環境プレイヤーズ・ハンドブック』ダイヤモンド社、362頁</p> <p>堆積学研究会編(1998)『堆積学辞典』朝倉書店、470頁</p> <p>根本順吉・宇井純・山田國廣編(1992)『地球環境辞典』三省堂、391頁</p>		
訳書	<p>フリッツ・J. W.、ムーア・J. N.〔原田憲一訳〕(1999)『層序学と堆積学の基礎』愛智出版、386頁</p> <p>ピーター・D・ウォード〔瀬戸口烈司・原田憲一・大野照文訳〕(1993)『メセラの軌跡:生きた化石と大量絶滅』青土社、352頁、年10月</p>		

原著論文	<p>Watanabe, Y., Kitajima, T., Kimura, M. and Harada, K. (2006) Solution with modified perceptron to tunnel cutting face evaluation problems. <i>Geoinformatics</i>, 17(2), pp. 61-70.</p> <p>Harada, K. and Glasby, G. P. (2000) Human impact on the environment in Japan and New Zealand, <i>The Science of Total Environment</i>, 263, pp. 70-90.</p> <p>Harada, K. (1995) Importance of the cyclical view in understanding the characteristics of Earth's environment and resources. In: S. Itoh and Y. Yasuda (Eds.) 'Nature and Humankind in the Age of Environmental Crisis' (Int. Symp. 6), <i>Int. Res. Cent. Japanese Studies</i>, pp. 233-239.</p> <p>Healy, T. and Harada, K. (1991) Modern environmental assessment procedures for enclosed sea, <i>Marine Pollution Bulletin</i>, 23, pp. 355-361.</p> <p>Healy, T. and Harada, K. (1990) Are Japanese academic earth scientists doing the best for the earth science problems facing Japan?, <i>Episode</i>, 13(1), pp. 13-17.</p> <p>Harada, K. and Nishida, S. (1979) Biochronology of some Pacific manganese nodules and their growth mechanism, In : CNRS, Ed., 'La genese des Nodules de Manganese', CNRS, Paris, pp. 211-216.</p> <p>Harada, K. (1978) Micropaleontologic investigation of Pacific manganese nodules, <i>Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Geol. & Mineral.</i>, 45(1), pp. 111-132. (学位論文)</p> <p>Harada, K. and Nishida, S. (1976) Biostratigraphy of some Pacific manganese nodules, <i>Nature</i>, 260(5554), pp. 770-771.</p> <p>Bornhold, B., Mascle, J. and Harada, K. (1973) Suspended matter in surface water of eastern Gulf of Guinea, <i>Marine Geology</i>, 14(2), pp. M21-M31.</p> <p>Wall, D., Dale, B. and Harada, K. (1973) Description of new fossil dinoflagellates from the Late Quaternary of the Black Sea, <i>Micropaleontology</i>, 19(1), pp. 18-31</p>
論文	<p>原田憲一(2016) 第2部ディスカッション 発表1 セントヘレンズ火山の体験、第3部 比較文明学会「災害と文明プロジェクト」 災害と文明のシンポジウムⅡ、鎌田浩毅・原田憲一他「火山列島の災害と文化」、「モノ学 感覚価値研究」モノ学感覚価値研究会報、10号、100-102頁</p> <p>原田憲一(2011) 平安京の永續性を京都盆地の資源から考える、山形応用地質、31号、69-73 頁</p> <p>原田憲一(2011) 地質と文明——吉岐・対馬・済州島をめぐる資源人類学の旅——文明(東海大学文明研究所)15号、3-12頁</p> <p>Harada, K. (2010) The Significance behind the Exhibition Beauty born of the Earth and Beauty Born of Human Beings, <i>Art Section of Mono-logy/Sense-Value Study Group (Editor) "MONOKEIRO"</i>, Bigaku Shuppan (Tokyo), pp. 56-63.</p> <p>Harada, K. (2009) Professor Seibold und die Wissenschaft (ein Teil von "Leopold-von-Buch-Plakette verliehen an Prof. Dr. Eugen Seibold"), <i>Z. dt. Ges. Geowiss.</i>, 160/2, S. pp. 107-109.</p> <p>原田憲一(2009) シンポジウム2 スローライフ・スローフォト、ピンホール写真芸術学会誌、2号、61-62頁</p> <p>原田憲一(2008) 1億年後の世界から見た人間の生命史的意義——美の化石美術館構想、山形応用地質、28号、45-51頁</p> <p>原田憲一(2008) 美の化石美術館、GENESIS(京都造形芸術大学)紀要、12号、363-370頁</p> <p>原田憲一(2008) 環境学から見たピンホール写真、ピンホール写真芸術学会誌、創刊号、17-23頁</p> <p>原田憲一(2007) 地学を文理融合のトップランナーにしよう、理科教室、50(7)、36-43頁</p> <p>原田憲一(2006) 地球史が教える若者の生き方、月刊環境未来、15(3)、6-14頁</p> <p>原田憲一(2005) 地球を巡る水と我われの暮らし、但馬カルチャー、7巻、1-21頁</p> <p>原田憲一(2005) 資源科学の観点から地球文明のあり方を問う、月刊NIRA政策研究、18(1)、82頁</p> <p>原田憲一(2004) 美しくなってきた地球と人間の役割、自然と環境、6、28-38頁</p> <p>原田憲一(2001) 沖縄文化 理解深化のために——資源人類学的アプローチ、比較文明、17、153-154頁</p> <p>原田憲一(2000) 地球46億年の歴史が教える私たちの生き方、月刊環境未来84、25-27頁、85/86、25-27頁、87、16-18頁、88、24-25頁</p> <p>原田憲一(1998) つながりのなかで生きる、地域経済研究会報、27、11-20頁</p>
作品	<p>原田憲一(2010) 作品「遠い生命・近い生命」、ピンホール写真芸術学会誌、3号、23頁</p> <p>原田憲一(2009) 作品「高原の朝」、ピンホール写真芸術学会誌、2号、9頁</p>
学生へのメッセージ	
<p>大学進学を考えてはみたものの、まだ自分は何がしたいのか、何をすればよいのかが分からないと生真面目に悩んでいる高校生は多いのではないのでしょうか。私もそうでした。</p> <p>高校3年の時、何となく技術(工学)よりも理論(理学)を学びたいと思って、理学部のある大学を選びました。なんとか合格したものの、「これをやってみよう」という明確な目標はまるでなかったため、入学直後は、何を専門で学ぼうかと迷っていました。それでも、まさか中学・高校で習ったことのない地学を学ぼうとは夢にも思いませんでした。ところが、たまたま選択した教養科目の「地学実習」で、いくつかの代表的な岩石を観察したとき、いつ海岸の砂は固まって砂岩になるのだろうか、どうして秋吉台の石灰岩にはフズリナ化石が目に見える形で残っているのだろうか、という素朴な疑問を持ちました。そして、こうした疑問に、自分なりの答えを出そうと考えて、3年生から始まる専門課程では、まさかの地学(地質学)を学ぶことにしました。当初は余り熱心な学生ではなかったのですが、専門的な勉強をすればするほど、新たな疑問が次々に湧き出てきて、山や川や海岸を見る目は大きく変わりました。</p> <p>大学3年生の時から約50年間、地質学的な研究を続けてきましたが、まだ当初の疑問に答えを出すには至ってません。しかし、大学や大学院で見つけた疑問のいくつかには答えを出すことができました。いまは、そうした体験を通じて身に着けた考え方や知識を使って、約20万年前に出現した生物界の新参者である人間(ホモ・サピエンス)はどう生きればよいのかを、生き物の歴史の観点から考えています。答えがあるのかもわからない間ですが、それを意識して生活していると、思わぬことからヒントを得ることがあるので、毎日楽しく暮らすことができます。学生時代に地質学を学んで正解だったと、今は満足しています。</p> <p>自分の未来が描けなくて迷っている高校生のみなさん。まずは授業や日常生活で「あれ、これは何だろう。どうして、そうなるんだろう」という疑問を見つけましょう。自分が見つけた「なぜ」に自分なりの答えを探そうとすれば、どの大学の、どの学部で学べばよいか、決めることができるはず。まだ何も「疑問」が見つからない人は、文系か理系というように、大まかに自分に合いそうな分野を決めましょう。そして、できるだけ幅広く自由に学べそうな大学や学部を、時には先生や先輩の力を借りて、探してみよう。そうした大学に入ってまじめに努力すれば、必ず自分だけの「なぜ」が見つかるはず。そして、一旦なぜ解きにはまると、考える楽しみや新しい知識を得る喜びを味わうことができ、生きる力が湧き出てきます。たとえ4年間で満足できる答えが出なくても、自分なりに答えを出そうと一生懸命努力した体験は、一生の宝になります。これこそが大学で学ぶ価値だと言えるでしょう。</p> <p>私たちは大学の門の前で迷っている皆さんを精いっぱい応援します。</p>	